

阿 Q の革命

——革命参加の原因及びその革命観について

李 爲民

1. はじめに

魯迅の小説『阿 Q 正伝』¹では、自分の置かれている状況を正確に認識することができず、つねに自己欺瞞によって満足し、上からの圧力があってもそれと戦おうとせず、次々と自分より弱い者へ責任を転嫁する阿 Q 像が描かれている。²このような阿 Q は、『阿 Q 正伝』第 7 章「革命」、第 8 章「革命を許さず」では、革命に憧れを抱き、革命党になろうとする。ところが、村で革命党員になったのは「ニセ毛唐」などの若旦那たちで、阿 Q は追い返される。革命への参加を許されなかった阿 Q は、どさくさにまぎれて掠奪事件の犯人に仕立てられ銃殺されるという結末になる。この阿 Q の革命への転向とその結末について、鄭振鐸（筆名、西諦）は次のように疑問を投げかける。

私は晨报で初めてこの作品を読んだ時、あまり感心しなかったし、今でもやはり感心しない。作者は阿 Q の最期を急ぎすぎたようだ。彼はもう書き続ける気がなくなって、それでこんな風に勝手に彼に「大団円」を与えてしまったのだろう。阿 Q のような人物が、ついに革命党になる気を起こしたが、結局あんな大団円を迎えるとは、作者自身さえ書き始めた当初は予測できなかったようだ。少なくとも人格が分裂しているように思う。³

鄭振鐸は、作品の終章である「大団円」、いわゆる阿 Q の結末に唐突な感が払えないと述べたうえで、阿 Q のような人物は本来なら革命に参加しないだろうとし、阿 Q の性格上の不一致が見られるという意見をここで提示しているのである。

鄭の疑問について、魯迅は「『阿 Q 正伝』の成立ち」で次のように回答している。

こうして、一週、一週切り抜けていくうちに、さて、阿 Q は革命党になるのかという問題にぶちあたった。私の考えでは、中国に革命が起こらなければ阿 Q も革命党にはならず、革命が起これば革命党になるだろう。わが阿 Q の運命はこれしきのものでしかなく、人格もおそらくは分裂などして

いない。民国元年はすでに過ぎ去って、そのひそみにならうこともかなわないが、今後もし改革があれば、またぞろ、阿 Q のような革命党が出現するにちがいない。⁴

分かりにくい言葉を並べているが、魯迅が鄭の意見を退けていることは明らかである。つまり、革命が起これば阿 Q は参加するというのである。

阿 Q の革命について、すでに多くの論考がある。例えば、邵荃麟は、阿 Q には反抗心があるとし、その反発が奴隷の失敗主義と結びついてしまうため、阿 Q の革命が「竹箒で辮髪をたばね上げる」にとどまってしまったのだと述べている。⁵支克堅は、魯迅が阿 Q の革命を描く意図は阿 Q の性格への批判にあるとし、周りへの仕返しや他人のものを自分のものにするという阿 Q の革命に対する考えは、当時の革命思想と相容れない一部の農民がもつ認識であり、魯迅はそれを暴いていると説く。⁶これらの研究は、阿 Q の革命を国民性の負の部分である「奴隷根性」または「精神勝利法」によるものと捉えている。⁷なぜ阿 Q が革命に身を投げようとしたのかという点については、検討されていない。

また近年では、阿 Q の革命に関して議論はされているが、新たな視点を提示するには至っていない。逢増玉は、魯迅が『阿 Q 正伝』を通じて辛亥革命の経験と教訓を提示しているという論点は後から付け足された政治的見解であり、実際の作品内容とは合致しないとし、阿 Q が革命に参加することの歴史的根源については分析していない。⁸鄭亜捷は、『阿 Q 正伝』の中で描写されている革命について、魯迅の作品である『呐喊』の内容に触れながら分析している。しかし、鄭論文は、中国近現代史の政治的背景を主体に革命について論じているため、魯迅の政治的見解について持論を述べるにとどまり、阿 Q の革命の根底にある中国の伝統的な思想についての考察が見落とされている。⁹

そこで本稿では、これらの先行研究を踏まえた上で、阿 Q が革命に身を投げようとする原因を探り、阿 Q の革命観について検討する。また、阿 Q の革命についての描写を通して、魯迅の創作意図についても考察を加えたい。

2. 阿 Q の革命への参加

まず、なぜ阿 Q が革命に身を投げようとするのか、この点から検討したい。

阿 Q は未荘という村の土地廟に住み、「きまった職もなく、麦刈りなら麦刈り、米搗きなら米搗き、舟こぎなら舟こぎと、他人の日雇い仕事をする」(98)

Ⓜという描写から、下層社会に属すると言っていいただろう。下層社会は、支配層が定めた枠組み、例えば政策や法律等に従い生活を営む。しかし、支配層は時に下層社会の意思に反して権力を維持するために権威をかざす。この時、下層社会は反発し、支配層へと反旗を揺るがす、これが革命の定義である。王富仁によれば、革命とは弱者（層）の強者（層）に対する反抗であり、強者（層）の弱者（層）に対する圧迫と対立した社会的力である。Ⓜしたがって、社会の下層に置かれる阿 Q は上からの圧力に対して反抗する。言いかえれば、阿 Q には革命の可能性があるのである。

さて、革命に対する阿 Q の反応はどうであろう。この点について、『阿 Q 正伝』の内容を確認しながら、革命が起こったときの阿 Q の言動に注目してみたい。阿 Q は少しの金銭と品物を持って城内から村に帰る。しばらく村の人々から尊敬の目で見られる。だが、実際には泥棒の手伝いをしていたことが分かったと、村人から警戒され、大物でないゆえに見くびられ、彼の権威は急速に失墜する。ちょうどその時、革命の噂が村に飛び込む。

阿 Q は、以前から革命党という言葉を目にしていたし、今年はまだ革命党を殺すところも自分の眼で見た。しかし彼はどこから得たものか、革命党とは謀叛だ、謀叛は自分には具合の悪いものだ、という意見を持っていて、そのため、これまでずっと「徹底的に憎」んできていた。(126)

阿 Q は革命を憎んでいたのである。それはなぜだろうか。このことは中国の、古くから形成されてきた等級思想と深い関わりがあると思われる。

『春秋左伝正義』昭公七年には、「天に十日あり、人に十等有り。下は上に事うる所以にして、上は神に共む所以なり。故に王は公を臣とし、公は大夫を臣とし、大夫は士を臣とし、士は阜を臣とし、阜は輿を臣とし、輿は隸を臣とし、隸は僚を臣とし、僚は僕を臣とし、僕は台を臣とす」Ⓜとある。つまり、人間の上下関係は空にある太陽と月のように自然なものであり、個人には最初から上の人間に対する隷属性があると説かれている。

『論語注疏』顔淵第十二には「君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草はこれに風を上るとき必ず優す」とある。Ⓜすなわち、君子つまり支配者の徳は風にたとえられる。小人（被支配者）の徳は風が吹いてくると、なびく草にたとえられる。また、『孟子注疏』滕文公章句上には「心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治められる。人に治められる者は人を養い、人を治める者

は人に養われる。これが天下の通義である」とある。⁴すなわち、頭脳労働に携わる者は支配し、肉体労働に従事する者は支配される。支配される者は肉体労働によって穀物、衣服、器物を生産して支配層を養い、支配層は自ら肉体労働による生産活動をせずに、肉体労働に従事する者に養われるのが天下の普遍的な道理なのである。

このような等級思想は国民に広く浸透することによって社会的通念となった。では、なぜ等級思想が封建社会において強調されていたのであろうか。簡単に言えば、厳格な等級思想は支配層の利益に符合すると同時に、当時の社会の安定と発展にもプラスであったからである。等級思想によれば、国の君主はよく国を治め、民は君主に忠実でなくてはならず、人それぞれが自分の身分を自覚し、君主と臣下または君主と民という上下の秩序を保っていく。このようにしてこそ、国は安定し、人民も安定した生活を送れると考えられていたのである。

一方、等級思想は悪い影響も及ぼした。それは人とは社会的に不平等な存在であると容認することである。等級思想によって、支配層は思うままに被支配層を酷使できるが、被支配層が支配層に逆らうことは大きな罪とされた。この点について『阿 Q 正伝』からも見出すことができる。『阿 Q 正伝』第 1 章「序」に、阿 Q が趙姓を名乗ろうとしたが、村のお偉方である趙旦那に殴られ、「わしに貴様みたいな親戚がいてたまるか」(95-96)、「貴様に趙を名のる資格なんかないわ」(96) という理由で許されなかった、という場面がある。阿 Q は趙旦那の無理を黙って受け止めるだけであったが、彼が反抗しなかったのは村の権力者、いわゆる支配階級である趙旦那に逆らってはいけないという等級思想によるものと思われる。また、阿 Q が革命を憎むことも等級思想によって生まれたと考えられる。前掲引用箇所のように、阿 Q は城内で革命党が処刑される光景を見た。そこで革命は目上に背く行為であることを知らされた。目上に逆らうことはいけないことで、憎むべきだというのが阿 Q の意見である。

このように、そもそも革命の可能性がある阿 Q は、革命するどころか、革命を憎むこととなる。ところが、革命の噂が広まると、百里に名のとどろく拳人旦那が縮み上がり、村の人々にも不安がつる。その様子を見て、「革命も悪くないぞ」、「謀叛？おもしれえ」(128) という阿 Q には、革命に対する態度の豹変が見られる。その理由は革命の威力にある。

阿 Q は日頃村人からいじめられ、「精神勝利法」で自己満足するが、彼は「また気位が高く、未荘の村民などまったく彼の眼中に」(98) ない。彼にとって

自分の優越を示す威力のあるものが必要であった。人々が大いに革命を恐れていることから、阿 Q が革命の威力を感じ取ったことは想像しがたくない。この点が次の描写により強く示されている。それは革命の噂が村に伝わり、阿 Q が酔いに任せて「謀叛だ、謀叛だ」と叫びながら通りを歩いた時の村人の反応である。

未荘の連中はみな驚きと恐れのみなごしで彼を見た。こんな哀れなまなごしは、阿 Q がこれまで見たことのなかったもので、一目見ただけで、彼は六月に氷水を飲んだようにいい気持ちになった。(126)

阿 Q の謀叛の声が村の人々を震撼させ、人々から畏れられる。一方の阿 Q はますます得意になる。阿 Q にとっては革命はおのれのうつぶんを晴らす絶好の機会である。そこで、阿 Q は革命に身を投じようとする発想の転換を図り、革命に対して幻想しはじめる。下層社会に属して抑圧される側であった阿 Q は、「抑圧の移譲」¹⁵によって、権威の精神的重みを感じ、究極的権威からくる優越意識を持つ抑圧する側へと変貌していったのである。

3. 阿 Q の革命への幻想

では、阿 Q の思い描く革命とはどのようなものか。ねぐらの土地廟で阿 Q は革命に参加する夢を見る。

真っ先にやっつけるのは小 D と趙旦那だ、それから秀才、ニセ毛唐だ、……何匹か残してやるか、ひげの王は本来なら残してやってもいいんだが、しかしこれもだめだ。

(中略)

品物はと、……まっすぐ入って行って箱をあける、銀の延べ棒、銀貨、カナキンの上着、……秀才の女房の寧波寝台をまず土地廟へ運ぶ。つぎには銭家のテーブルと椅子を並べるんだ……それとも趙家のにしておくか。

(中略)

趙司晨の妹はぶおんなだ。鄒七嫂の娘はもう五、六年たたなきゃだめだ。ニセ毛唐の女房は辮髪のない男と寝るなんて、ペッ、ろくなやつじゃない。秀才の女房はまぶたに傷痕がある……呉媽は久しく見ないが、どこにいるかな、……惜しいことに大足だ。(128)

小 D は阿 Q の仕事を奪い取った人物である。趙旦那は、すでに触れたように、

阿Qの姓を名乗る自由を奪った村の権力者である。秀才は趙旦那の息子である。ニセ毛唐は、「第二の屈辱的な事件」¹⁴においてステッキで阿Qを殴りつけた人物である。ひげの王はしらみ取り競争で勝って阿Qの頭を壁にぶつけた人物である。これらの人物は阿Qをいじめたことがある点で共通する。阿Qの考えは、革命党に参加して権力を握ったら、真っ先に小D達をやっつける、というものである。ここで、阿Qにとって革命の第一義が自分の仇を討つことにあるのは明白である。その次は品物と女である。要するに、阿Qの思い描く革命とは、権力をわが手にしておのれの仇を討ち、金持ちの家から物を奪い、村の女を自由に選ぶ、というものである。阿Qの革命の本質は、阿Q自身の言葉で表されるように「欲しいものはおれのもの、好きなやつもおれのもの」(126頁)ということにある。

このように、阿Qにとっての革命は、徹底的に憎むものから革命党に降参してやろうとするものに転向したのである。ここで注目したいのは、報復・金銭・女性を目的とする阿Qの革命に対する考え方である。この点に関して想起されるのは、魯迅が1919年に発表した「随感録五十九『聖武』」である。その内容は次のようである。

昔、秦の始皇帝はたいへん豪勢だった。劉邦と項羽とはそれを見た。劉邦は「ああ、大丈夫まさに此の如くなるべきなり」と言い、項羽は「彼、取って代わるべきなり」と言った。項羽は何を「取」ろうとしたのか。それは劉邦が「此の如く」と言ったものである。「此の如く」の程度にはそれぞれにちがいはあっても、これはしかし、誰でも取りたいものだ。

(中略)

「此の如く」とは何を言うのか。言い出せば長くなるが、簡単に言えば、純粹に獸性の側面での欲望の満足——威福、子女、玉帛——、ただそれだけだ。けれども、すべての大丈夫、小丈夫にとっては、それが最高の理想(?)なのだ。私は現在の人も、まだこの理想に支配されているのではないかと、怕れるのである。¹⁵

劉邦は、元は秦の地方の小役人であり、陳勝・呉広の乱を機に兵を挙げる。項羽は、元は秦の武将である。二人は反秦連合に参加し、秦の都咸陽を占領し、秦を倒す、いわゆる農民蜂起の指導者である。劉邦の感想には羨望が感じられ、項羽の感想にははつらつとした若者の意気込みが表れていると評される。¹⁶ともあれ、ここで魯迅が指摘しているのは、二人の理想は始皇帝のようになって威

福・子女・玉帛という欲望を満すことにあるという点だ。日雇労働者である阿 Q は天下を争う劉邦と項羽に匹敵することはできないが、彼の革命に対する考えは劉邦と項羽の考えと大した差はない。

王富仁は、真の革命者とは革命思想を有する人間であり、その革命思想をもって中国の社会と歴史を考察し、その上で自分の人生を選ぶ者としている。また、社会全体の進歩とは関係せず、個人の運命転換のみに関わる言動は革命の範疇に属しないと述べている。⁹王富仁の説にしたがえば、阿 Q は真の革命者ではなく、その革命意識がすべて自分の利益のためであることは明らかである。

以上の内容を整理すると、弱者層に置かれて無一文の阿 Q は、強者層である村の顔役趙旦那などからのいじめに対して反抗すべきであるが、目上に逆らってはいけないという等級思想によって、それができず、反対に目上に逆らう革命を憎んだ。一方、人々が革命の噂で慌てふためく様子を見て、阿 Q は革命の威力を感じ取り、革命に参加することに翻意した。阿 Q は革命に対して幻想を抱きはじめ、「欲しいものはおれのもの、好きなやつもおれのもの」と考えた。阿 Q の革命に対する考えは、革命思想ではなく、例えば前述した農民蜂起の指導者劉邦、項羽の考えに合致している。

ここで、冒頭で取り上げた、阿 Q は中国に革命が起こらなければ革命党にはならず、革命が起これば革命党になるだけで、人格の分裂などしていないという魯迅の言葉の意味を今一度考えてみよう。前述の通り、阿 Q は被支配階級に属するので、支配階級の抑圧を受け、不満を抱き、支配者に対して反抗心をもっている。あらゆる革命の基礎は反抗心にあるとすれば、阿 Q は反抗的という点で革命に参加する可能性がある。また、革命というヘゲモニー争奪戦は阿 Q が支配者になり得る機会を有している。阿 Q は、自身に内在する革命への志向性と革命自体に潜在する転覆性という二つの要因が相まって、その相乗効果をうけて革命に身を投じざるを得なくなる。魯迅の言葉の意味はここにあるのではないだろうか。

4. 魯迅の創作意図

阿 Q は革命に幻想を抱いた後、第 9 章「大団円」で悲惨な結末を迎える。ある夜、趙家の掠奪事件が起こり、阿 Q はわけがわからぬまま犯人にされ、革命政府によって処刑される。阿 Q が身を投じようとする革命が辛亥革命であることは、作中にはっきりと書かれていない。ただし第 7 章「革命」の冒頭に「宣

統三年九月十四日」と記されており、この日は西暦 1911 年 11 月 4 日、すなわち辛亥革命の武昌蜂起の 25 日後である。²¹したがって、阿 Q が参加する革命は辛亥革命で間違いない。

「大団円」の結末には辛亥革命に対する深刻な諷刺が漂っている。ブルジョア革命である辛亥革命は民衆を覚醒せず失敗に終わる。阿 Q のような農民の要求に応えることができていない点で、それは真の革命とはなっていない。『阿 Q 正伝』の主旨は辛亥革命の不徹底さを描き出すところにある。このような見解が中国や日本の『阿 Q 正伝』研究において何度も述べられてきた。²²しかし、これらの見解には疑問を抱かざるを得ない。

例えば、『阿 Q 正伝』第 8 章「革命を許さず」には革命直後の様子が描かれている。

未荘の人心は日ましに落ち着いていった。伝わってきた話によると、革命党は入城したが、何もたいした変わりはない、ということだった。県知事さまはもとのままで、名前がなんとか変わっただけ、それに挙人旦那も何とかというお役人——こういう名前は、未荘の者はちゃんと言えないのだ、——になったし、軍隊を指揮しているのも以前の隊長のままだという。

(130)

革命は行なわれたが、目立つ変化はなかったというのである。こうして社会変革の欠如と旧支配階級の存続という点から、辛亥革命の限界や誤りがしばしば指摘されている。²³しかし、近年では、辛亥革命は指導者であったブルジョア革命派の軟弱さによって失敗したと見るのではなく、その歴史的意義を客観的な視点から捉えようとする研究が主流になってきている。²⁴辛亥革命は全く失敗したわけではなかったというのである。共通しているのは、清朝の打倒によって二千年来の専制君主制にピリオドを打ったことに重要な意味があるという指摘である。

例えば、久保田文次は辛亥革命の理論と実際について考察を行い、「二千年来の専制王朝が打倒されたことは、この長期にわたる専制支配を支えてきた正統イデオロギーの動揺をもたらし、人々は精神上、空前の大解放を謳歌した。人々はそれまでの禁制から解放され、政治問題・社会問題について、大胆に考え、積極的に発言し、行動するようになった」という見解を打ち出している。²⁵とすれば、革命党に身を投じようとする阿 Q が、革命の参加を許されず、革命政府

によって殺されていったという場面をどう理解するのだろうか。この点について筆者は以下のように考える。

魯迅の創作意図は、辛亥革命の失敗というより、阿 Q の革命に対する態度から民衆の弱点を描き出すことにあるように思われる。主人公阿 Q を辛亥革命前後の農村部で暮らしている日雇労働者として設定したからには、当然、革命の発生、阿 Q の革命に対する反応、革命後の様子という一連の場面を描かなければならない。作品の前半において、阿 Q は趙旦那といった強者からのいじめに対して反抗せずにいたが（第一章「序」、若尼さんといった自分より弱者に対しては逆にいじめていた（第三章「続勝利の記録」）。元々、阿 Q は弱者をいじめ、強者を恐れる人物だったのである。したがって、いじめる相手が恐怖を抱く革命が自分に波及してきた時、阿 Q がそれに乗り出すのは自然なことである。だが、革命を「欲しいものはおれのもの、好きなやつもおれのもの」と認識する阿 Q の考え方は、真の革命者が持つものではない。なぜなら、革命は弱者の強者に対する反抗であり、弱者はその反抗によって自身が強くなって自立することが可能だからである。また、強者（層）の圧迫を受け、その圧力を自分より弱いものに転嫁するのも革命ではない。このように、阿 Q の革命についての描写から、阿 Q 像の弱点、いわゆる「悪い根性」⁵がより鮮明になる。

5. おわりに

以上、本稿では阿 Q が革命に身を投じようとする原因を取り上げ、阿 Q の革命観について検討してきた。阿 Q にとっての革命は社会全体の改革と関わる現代的意味での革命ではなかった。等級思想によって、阿 Q は革命とは謀叛だ、謀叛とは悪いものだと考え、革命を憎んでいた。ところが、革命の威力を感じ取ったとたん、革命党に身を投じようとした。阿 Q の革命参加の目的は、一部の農民蜂起の指導者と同じで、報復・金銭・女性という個人の欲望を満たすところにある。魯迅は阿 Q の革命観を否定的に描いているのである。

また、『阿 Q 正伝』のテーマは辛亥革命の失敗を描いていると指摘されてきたが、近年の研究では辛亥革命は失敗ではなく、未完の革命であるとされている。むろん、阿 Q の「大団円」は皮肉にも悲惨なものである。しかし、その悲惨さにも魯迅の意図があったのである。阿 Q のような民衆が自ら覚醒しなければ、革命に参加しようとしても結局は犠牲になるほかない。つまり、魯迅の意図は阿 Q の弱点を暴くことにあったのである。

注

- 1 本稿では『阿 Q 正伝』（『魯迅全集』第 1 卷、人民文学出版社、1981 年）を基本とする。
- 2 自己満足・自己欺瞞の阿 Q 像については、阿 Q の精神勝利法に基づいて唱えたものである。阿 Q の精神勝利法研究には、景慧『『阿 Q 正伝』論——精神勝利法の行方』（宇都宮大学教養部研究報告第 1 部、1993 年）、丸尾常喜『『阿 Q 正伝』再考——『類型』について』（『中国学志』第 21 号、2006 年）、李爲民「阿 Q の精神勝利法——国民性説と人間心理説をめぐって」（『多元文化』第 10 号、2010 年）などがある。
- 3 鄭振鐸（西諦）「呐喊」、『文学週報』第 3 卷、上海書店印行、1984 年、50 頁。初出は『文学週報』第 251 期、1926 年 11 月 21 日。
- 4 魯迅『『阿 Q 正伝』の成立ち」、是永駿訳『華蓋集統編』、『魯迅全集』第 4 卷、学習研究社、1984 年、424 頁。
- 5 邵荃麟「關於『阿 Q 正伝』」、中国社会科学院文学研究所魯迅研究室編『1913-1983 魯迅研究學術論著資料匯編』第 3 卷、中国文聯出版公司、1987 年。初出は『青年文芸』第 1 卷第 1 期、1942 年 10 月 10 日。
「竹箒で辮髪をたばね上げる」については、前掲魯迅「『阿 Q 正伝』の成立ち」の中の言葉である。辮髪とは清朝に服従することを表しており、「竹箒で辮髪をたばね上げる」ということは、清朝に服従することをやめて革命へ参加することを意味する。
- 6 支克堅「關於阿 Q 的『革命』問題」、『文学評論叢刊』第 4 輯、中国社会科学出版社、1979 年。
- 7 奴隸根性とは、自分の屈辱を屈辱と意識しようとしめない気性である。精神勝利法とは、つねに敗北する阿 Q が欲求不満の現実から非現実的な世界へ逃避し自己を満足させる一連の心理操作である。
- 8 逢増玉『『阿 Q 正伝』與辛亥革命問題的再思考』、『文学評論』第 5 期、2007 年。
- 9 鄭亜捷「多面的『革命』——『阿 Q 正伝』中的『革命』内涵再探討」、『海南師範大學學報』（社会科学版）第 4 期、2008 年。
- 10 引用は丸尾常喜訳『阿 Q 正伝』（『魯迅全集』第 2 卷、学習研究社、1984 年）による。以下、本稿における『阿 Q 正伝』からの引用は同記に依拠し、引用文に続けて頁数を括弧に入れて示す。
- 11 王富仁「魯迅與革命——丸山昇『魯迅・革命・歴史』読後（上）」、『魯迅研究月刊』第 2 期、2007 年、33 頁。
- 12 左丘明伝、杜預注、孔穎達正義『春秋左伝正義』、『十三經注疏整理本』第 19 卷、北京大学出版社、2000 年、1424-1425 頁。原文は次の通り。「天有十日、人有十等、下所以事上、上所以共神也、故王臣公、公臣大夫、大夫臣士、士臣阜、阜臣輿、輿臣隸、隸臣僚、僚臣僕、僕臣台。」
- 13 何晏注、邢昺疏『論語注疏』、『十三經注疏整理本』第 23 卷、北京大学出版社、

- 2000年、188頁。原文は次の通り。「君子之徳風、小人之徳草、草上之風、必偃。」
- 14 趙岐注、孫奭疏『孟子注疏』、『十三經注疏整理本』第25巻、北京大学出版社、2000年、173頁。原文は次の通り。「勞心者治人、勞力者治於人、治於人者食人、治人者食於人、天下之通義也。」
- 15 「抑圧の移譲」については、丸山真男「超国家主義の論理と心理」（『現代政治の思想と行動』、未来社、2006年）を参照。
- 16 「第二の屈辱的な事件」は、『阿 Q 正伝』第三章「続勝利の記録」に書かれている。ひげの王との喧嘩に負けたところ、阿 Q の嫌いな「ニセ毛唐」が通りかかり、阿 Q は、腹立ちまぎれに「ニセ毛唐」に罵声を浴びせ、逆にステッキで殴られる、という事件である。
- 17 引用は伊藤虎丸訳「随感録五十九『聖武』」（『魯迅全集』第1巻、学習研究社、1984年、437頁）による。同文章の注によると、劉邦と項羽の発言は威風堂々とした始皇帝の行列を前にして言ったものという（前掲、439頁）。
- 18 市川宏「劉邦の逆境克服戦略——劉邦『咸陽』入城」、『項羽と劉邦——「器量」が分かつ人生の明暗』、世界文化社、1987年、85頁。
- 19 前掲王富仁「魯迅輿革命——丸山昇『魯迅・革命・歴史』読後（上）」、31頁。
- 20 『阿 Q 正伝』（『魯迅全集』第1巻、人民文学出版社、1981年、531頁）注41による。
- 21 例えば、王富仁「中国反封建思想革命の一面鏡子——「吶喊」「彷徨」綜論」（北京師範大学出版社、1986年、21頁）には「『阿 Q 正伝』の不朽の社会意義は、辛亥革命それ自身の弱点と覚醒しない民衆の弁証法的関連から、二者における対照的な描写を通じて、広範囲で辛亥革命の失敗による深刻な教訓を概括したことにある」とある。また、増田渉『魯迅の印象』（角川書店、1970年、251頁）には「この作品（『阿 Q 正伝』、筆者注）はだが作者が身を持って経験し、青春の情熱を注ぎ込んだいわゆる『辛亥革命』の内蔵を痛烈に暴き、その失敗を教訓として、再び新しい民族的決意を促すという主題が強く貫かれている」とあり、新島淳良『魯迅を読む』（晶文社、1979年、261頁）には「魯迅は辛亥革命の本質（その不徹底性、欺瞞性）を『阿 Q 正伝』で暴露したのだと思っている」とある。
- 22 例えば、尾上兼英「魯迅の『個人主義』と『人道主義』」（佐々木基一・竹内実編『魯迅と現代』、勁草書房、1968年、52頁）には、「つまり、辛亥革命によって民衆の生活は、——民衆だけではなく、おえら方まで——全く変わらなかったし、民衆生活が変われなければ、それは革命ではないという意味がこめられていると思います」とある。
- 23 近年の辛亥革命再評価については、金沖及「辛亥革命の歴史評価」（『人民日報』1981年4月13日第5版）を参照。
- 24 久保田次次「総論——辛亥革命の理論と実際」、『講座中国近現代史』第3巻、東京大学出版会、1978年、20頁。
- 25 悪い根性とは、怯懦、怠惰、狡猾といった国民性の負の部分を目指す。